

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00534

研究課題名(和文) 名詞化と補文化に関する通言語的研究—ユピック・エスキモー語を中心に—

研究課題名(英文) A Cross-Linguistic Analysis on Nominalization and Complementation: A Special Focus on Central Alaskan Yup'ik

研究代表者

田村 幸誠 (Tamura, Yukishige)

大阪大学・大学院人文学研究科(言語文化学専攻)・准教授

研究者番号：30397517

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本科研究費研究の最も大きな成果は"Nominalization in Central Alaskan Yup'ik,"という論文を、Nominalization in Languages of the Americas (Typological Studies in Language 124)という言語類型論の国際ジャーナル・書籍に投稿し、査読を経て掲載されたことにある。また国内でもnominalizationに関して特集された論文集に投稿し、査読を経て掲載された：「中央アラスカ・ユピック語からみた体言化理論」『体言化理論と言語分析』、大阪大学出版会、353-398。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在の言語学の一つの大きな課題は、英語や日本語などの有名・主要言語の特性を踏まえた上で、世界に6千あるとされる言語のデータにあたりその記述の妥当性を検証することにあると言える。私の研究は米国アラスカ州で話されているユピック・エスキモー語の現地調査とその通言語的な理論化にある。ユピック・エスキモー語は危機言語であり、近い将来なくなってしまう言語であると言われている。その言語を記述・記述し後世に残すことは大変重要なことでありまたその特徴から英語や日本語の特性を比較検証することは、英語や日本語においてどの部分が普遍性を持つものでどの部分が個別性を示すものなのかをよりはっきりとしたものにしてくれる。

研究成果の概要(英文)：I have written 5 articles and one book chapter during this grant-in-aid research, and the most significant result among them was that the following article was published in an international journal: "Nominalization in Central Alaskan Yup'ik," to Nominalization in Languages of the Americas (Typological Studies in Language (Typological Studies in Language 124), In addition, I submitted a paper to a collection of articles on nominalization in Japan, which was peer-reviewed and published: "Nominalization Theory from the Perspective of Central Alaskan Yup'ik," in Nominalization Theory and Linguistic Analysis, Osaka University Press, 353-398. Because of the covid 19, I had to extend the term of this grant-in-aid research for three years, but I could find some important correlation between complementation and prosody, part of which was publish at Chicago Linguistic Society.

研究分野：Linguistic Typology

キーワード：Nominalization Complementation Central Alaskan Yup'ik Cognitive Linguistics linguistic Typology

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 従来の言語学において理論研究、記述研究を問わず、関係詞節 (e.g. the man who stole the book/ the man I visited yesterday) の存在は当然とされ、例えばある言語の文法を記述、あるいは理論化しようとする際には、その当該言語において関係詞節がどのようなタイプを示すものであるのかという議論が活発になされてきた (e.g. Keenan and Comrie 1977, Comrie 2006)。まとめると、関係詞節の各言語における存在は当然であり、理論的にはいかに各言語の関係節を類型化するのが研究の問題であった。

(2) この研究の伝統を背景に近年の記述研究において、関係詞節の存在の普遍性に疑問が持たれるようになった。つまり、従来のように関係詞節を本質的な文法の存在物として認める立場 (e.g. Dixon 2010) と関係詞節は名詞構造、あるいは名詞化 (nominalization) の一種に過ぎないとする立場 (e.g. DeLancey 2002, Shibatani 2009) でいわば論争が起きる形となった。また、この研究の流れを受けて後者の立場では従来の補文節も普遍的な名詞化の表れに過ぎないのではないかという主張が生じた。

(3) 世界の言語の関係節、補文節に関して名詞化の観点から研究を見直そうという動きが生じていた。

## 2. 研究の目的

本研究は 1 に示した研究の背景を前提に、アメリカ合衆国アラスカ州では話されているユピック・エスキモー語 (Central Alaskan Yup'ik, an Eskimo-Aleut) では名詞化をどのように記述できるのかを調査し、上記の研究にデータを提供しまた理論的に貢献しようとするのが研究の目的である。

## 3. 研究の方法

(1) ユピック・エスキモー語の母語話者の元を訪れ、インフォーマント調査を行う。研究代表者はこれは約 15 年ユピック・エスキモー語を調査しており、主要なインフォーマントは 3 名、量的な研究の必要がある場合にはその 3 名の母語話者を通じてデータを取る形を採用しており、今回も主要 3 名のインフォーマントに依頼し、様々なタイプのデータについて議論してもらうことを約束し研究を始めた。年に 2 度 2 週間ほど彼らが生活する街を訪れ実地調査を行う。

(2) 日本に滞在中は現地調査において集めたデータの整理、そして、理論に関する文献を整理する。また、Masayoshi Shibatani らの名詞化研究者と連絡をとり、様々な角度からユピック・エスキモー語のデータを精査する。

## 4. 研究成果

(1) 名詞化と補文化に関する国際ワークショップを開催した。2019 年 9 月 14 日から 15 日に大阪大学 (南部陽一郎ホール) にて、名詞化理論の最前線に立つ研究者である、Scot DeLancey (Oregon University) と Masayoshi Shibatani (Rice University) を基調講演者として迎え、国内外の研究者で体言化に関する国際ワークショップを開催した (名詞化という限られたテーマであるにも関わらず 2 日間で述べ 76 名の参加者があった)。Indo-European languages, Sino-Tibetan Languages, ケチュア語、エスキモー語と幅広い種類の言語が壇上に挙げられ非常に有意義なワークショップであった。研究代表者は、司会を行うだけでなく、"Head-Framed and Dependent-Framed Nominalization" という発表も行った。また、このワークショップの成果の一部が『体言化理論と言語分析』(大阪大学出版会, 2021) に発展した。この論文集において研究代表者は「中央アラスカ・ユピック語からみた体言化理論」という論文を寄稿し査読の上採用された。前半部ではボリビア・ケチュア語のデータを用いて最新の名詞化理論をかなり分かりやすく説明した上で、後半部でユピック・エスキモー語のデータをそのケチュア語のデータに対比させる形で理論的説明を行った。

(2) 研究代表者の今回の研究における最も大きな成果は："Nominalization in Central Alaskan Yup'ik," *Nominalization in Languages of the Americas (Typological Studies in Language 124)*, edited by Roberto Zariquiey, Masayoshi Shibatani, and David W. Fleck, John Benjamins, 273-299. であり、国際誌に投稿、査読の上掲載された論文である。上記 1 のテーマにそって、主要な先行研究を振り返った上で、ユピック・エスキモー語の特徴に関して議論されている。まず、語彙的な名詞化に関して 5 タイプに大別できることを先行研究、そして現地調査をもとに明確化し、その上で、その語彙的な名詞化で用いられる名詞化接辞がそのまま同じ形で文法的な名詞化 (関係節化) そして補文化に用いられるというユピック・エスキモー語の特徴を説明した。このデータが示す理論的含意は次の通りである。まず、ユピック・エスキモー語の関係詞相当表現には、関係代名詞等は存在しておらず、通常の名詞化、形成された名詞化表現の修飾用法がそのまま用いられる。また補文化は名詞化された表現がそのまま埋め込み節として機能すること、つまり、この二つのことからユピック・エスキモー語では従来のようにヨーロッパ言語に範を取った形での関係詞節化や補文節化といった記述は、ユピック・エ

スキモー語の記述はその実態を非常に歪めるものであり、DeLancey (2002)および Shibatani (2009) に示された名詞化(nominalization) の観点から記述した方が妥当であるという結論を導き出せるということである、さらに、ユピック・エスキモー語では節の名詞化、補文節化に用いられる名詞化辞には語彙的名詞化と同じ接辞が用いられるという特徴を示す。このことが示す理論的含意は、語彙と文法の連続性である。従来の研究において語彙と文法は別のものとして記述される傾向にあるが、近年の様々な言語のデータが示すことは、両者が実際には連続体を作っているというものの見方である。エスキモー語において語彙的名詞化と文法的名詞化のその両方において同じ接辞が用いられるという事実は、語彙と文法の連続性を主張する理論をサポートするだけでなく、まさに、その下位分野の名詞化の連続性そのものを示す証拠と見ることができる。以上のような大変貴重なデータをユピック・エスキモー語は理論的研究に提供できるのである。また、ここでの調査データの一部は Oxford Research Encyclopedia of Linguistics, 2021 の syntax の項で用いられりもしている。以下に実際に調査した中で興味深いと考えられる例文を当該論文から例として掲載する(番号は当該論文のまま)。

- (23) a. Angute-m tamar-a-a [nutek-ø  
man-3SG.ERG lose-TR.IND-3SG.3SG gun-3SG.ABS  
tungu-lria-ø]<sub>NP</sub>  
be.black-NMZR.ARG-3SG.ABS  
'The man lost the black gun.'  
Literally: 'The man lost the gun, a black one.'
- b. [Angute-m uquri-lria(lrii)-m]<sub>NP</sub> angqaq-ø  
man-3SG.ERG be.fat-NMZR.ARG-3SG.ERG ball-3SG.ABS  
kitngig-a-a.  
kick-TR.IND-3SG.3SG  
'The fat man kicked the ball.'  
Literally: 'The man, a fat one, kicked the ball.'
- c. Caan-(aaq)-ø an-'u-q [ak'a-lraq(llar)-mek  
John-3SG.ABS come.out-INTR.IND-3SG be.old-NMZR.ARG-3S.ABL  
nem-'ek]<sub>ABL</sub>  
house-3S.ABL  
'John came out of the old house.'  
Literally: 'John came from an old one, from the house.'

(3) (1)と(2)の研究を受けて、ユピック・エスキモー語の名詞化・補文化記述をさらに精緻化そして理論的貢献を目指して執筆したものが、「Cross-Indexing View からみた中央アラスカ・ユピック語の人称接辞に関する一考察」『時空と認知の言語学 X』, 31-40.である。エスキモー語は人称接辞が非常に発達した言語であるが、「一致の破れ」現象を考察することで、上記の名詞化理論の立場をサポートする意図で書かれたものである。論文では、まず、Siewierska (1999) による通言語的な「人称代名詞から一致のマーカーへの文法化」を紹介した上で、その文法化を動機づけるには、Cross-Indexing View という人称接辞に対する新たな考え方が必要であるという Haspelmath (2013) の類型論的主張を考察した。これは名詞句が名詞句として単独でアクセス・認知されていることを意味する。3.1 節でCAY の一致現象、特に、項名詞句と人称接辞による(同一の)対象物の指示に関する相互補完的な機能を観察することで、Cross-Indexing View という通言語的概念が個別言語の理解を深めるものになることを示した。また、3.2 節では、英語や日本語の観点からは理解しにくいCAY の場所表現が、非対称的な参照点構造による関係ではなく、対称的な関係を前提とする Cross-Indexing View による機能が関与しているからではないかと指摘した。以下に実際に調査した中で「一致の破れ」に興味深いと考えられる例文を当該論文から例として掲載する(番号は当該論文のまま)。

(12) CAY (Caan Topetlook, a speaker)

a. Pairte-llru-a-(ø)qa imuna elitnaurista(ø) kipusvig-mi.

see-PAST-TR.IND-1SG.3SG that.3SG.ABD teacher.3SG.ABS store-LOC

'I saw that teacher at the store.'

b. Pairte-llru-a-nka imukut elitnauriste-t kipusvig-mi.

see-PAST-TR.IND-1SG.3SG that.3PL.ABS teacher-3PL.ABS store-LOC

'I saw these teachers at the store.'

(4) 上の(3)の論文は本研究において非常に重要な位置を占めるがまだ英語化して国際誌に投稿されていない。2020年3月からコロナウイルスが世界的に蔓延し、研究代表者がアラスカ州の村に行き、現地調査が約3年半困難になってしまった(研究代表者が訪れている街が大変な被害にあっただけでなく、インフォーマントも大変な被害にあってしまった。)3の論文に関しては2024年3月ようやく現地調査を再開することができ、補足となるデータを取ることができた。今後2の論文と同様に英語化し、国際的に発表したいと考えている。また名詞化に関しては(3)の「一致の破れ」に加えてプロソディの問題も非常に関係してくる。大変興味深いことにユピック語とイヌイット語の関係は大阪方言と東京方言の関係に非常に似ている側面を示す。2024年3月に調査を再開しこの名詞化とプロソディに関する調査も多行った。この点に関する研究成果発表も2024年度以降になると考えられる。音

声の調査方法に関しては University of British Columbia の Mark Turin 教授にヒマラヤ言語のデータ保管方法の説明を受けるなどして大変大きな suggestion をいただいた。また、この研究に関して継続的にアドバイスをいただけることになっている。また、ユピック語、イヌイット語のプロソディと日本語の大阪方言と東京方言の違いに類型論的に見た場合に似た側面があると述べたが、この名詞化とプロソディの関係を明らかにすべく、日本語の基礎的調査を大阪大学助教の松浦幸祐氏と共同研究を行った。ユピック語の名詞化とプロソディの関係に関して日本語の観点を加える形で 2024 年度以降類型論化していきたいと考えている。(5)(4) の目的に関して、コロナ禍で現地調査に赴けない間に、音声学の非常に著名な本を一冊貞光宮城氏と共訳という形で出版した。これはプロソディ研究に向かう上で研究代表者の知識を強固なものにしたいという意識から翻訳を行った。(田村幸誠・貞光宮城 (2021) 『母音と子音：音声学の世界に踏み出そう』 (原著：Vowels and Consonants, by Peter Ladefoged, Blackwell, 2012), 開拓社, 全 312 ページ) また、この目標に向けて音声と文法記述に関する論文も執筆した(「Profile からみた Phonologization—認知言語学的視点からみた音韻記述に関する「橋渡し」的考察—」『大阪大学 英米研究 47』, 39-58.)。加えて学会でのシンポジウム、パネリスト、日本で開かれた国際学会の招待講演も行った(「プロファイルからみた文法化 (grammaticization) と音韻化 (phonologization)」, 日本英文学会九州支部大会 (第 3 部門 英語学 シンポジウム・パネリスト) 及び、"Toward a Fuller Symbolic View of Grammar: The Theoretical Orientation of Cognitive Phonology and Its Application to Japanese Prosody," 17th International Spring Forum, the English Linguistic Society of Japan, May 25th, 2024 at Kyoto University)。また日本語の東京方言と大阪方言の基礎的調査に関しては国際学会で発表を行った "Two Barriers for Osaka Japanese Learners: A Usage-Based Phonology Perspective," The Chicago Linguistic Society 59, at the University of Chicago, 2023 年 4 月 28 日。(松浦幸祐氏との共著)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 田村幸誠	4. 巻 47
2. 論文標題 Profile からみたPhonologization - 認知言語学的視点からの音韻記述に関する「橋渡し」的考察 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 英米研究	6. 最初と最後の頁 39-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田村幸誠	4. 巻 10
2. 論文標題 Cross-Indexing View からみた中央アラスカ・ユピック語の人称接辞に関する一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 時空と認知の言語学	6. 最初と最後の頁 31 40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田村幸誠	4. 巻 1
2. 論文標題 使用依拠モデルに基づく言語観	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 認知言語学の基礎（認知日本語学講座 第1巻）	6. 最初と最後の頁 197 265
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田村幸誠	4. 巻 98
2. 論文標題 Demonstratives in Cross-Linguistic Perspective (by Stephen Levinson et al)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 英文学研究	6. 最初と最後の頁 166 171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田村幸誠	4. 巻 1
2. 論文標題 中央アラスカ・ユピック語からみた体言化理論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 体言化理論と言語分析	6. 最初と最後の頁 353 398
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田村幸誠	4. 巻 9
2. 論文標題 地形調和仮説からみた中央アラスカユピック語の指示詞の使用に関する一考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 時空と認知の言語学 IX	6. 最初と最後の頁 11 20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Tamura, Yuki-Shige	4. 巻 124
2. 論文標題 Nominalization in Central Alaskan Yup'ik	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Nominalization in Languages of the Americas (Typological Studies in Language)	6. 最初と最後の頁 273-300
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 田村幸誠
2. 発表標題 ProfileからみたGrammaticalization とPhonologization - 認知言語学的視点からの音韻記述に関する「橋渡し」的考察 -
3. 学会等名 福岡認知言語学会
4. 発表年 2022年 ~ 2023年

1. 発表者名 Yuki-Shige Tamura, Kosuke Matsuura
2. 発表標題 Two Barriers for Osaka Japanese Learners: A Usage-Based Phonology Perspective
3. 学会等名 The Chicago Linguistic Society (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yuki-Shige Tamura
2. 発表標題 Dependent-Framed Grammatical Nominalization and Head-Framed Grammatical Nominalization: An Argument from Central Alaskan Yup'ik
3. 学会等名 Osaka International Workshop on Nominalization
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田村幸誠
2. 発表標題 中央アラスカユピック語 (CAY)に観察される体言化の特徴
3. 学会等名 第2回体言化研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田村幸誠
2. 発表標題 Nonce nominalization とlexical nominalization: 音と意味の並行関係に関する議論も含めて
3. 学会等名 第9回認知文法研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuki-Shige Tamura
2. 発表標題 Toward a Fuller Symbolic View of Grammar: The Theoretical Orientation of Cognitive Phonology and Its Application to Japanese Prosody
3. 学会等名 17th International Spring Forum, the English Linguistic Society of Japan (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 碓井 智子、田村 幸誠、安原 和也	4. 発行年 2021年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 304
3. 書名 認知言語学の基礎	

1. 著者名 Peter Ladefoged、Sandra Ferrari Disner、田村 幸誠、貞光 宮城	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 336
3. 書名 母音と子音	

1. 著者名 国立国語研究所	4. 発行年 2021年
2. 出版社 幻冬舎	5. 総ページ数 264
3. 書名 日本語の大疑問	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-



## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Osaka International Workshop on Nominalization	開催年 2019年～2019年
--	--------------------

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------